

藤原定家の本歌取りと「物語二百番歌合」

——共通する創作手法・読む行為——

山 本 美 紀

要旨

藤原定家は、歌の創作においては本歌取りを得意とし、多くの歌を残している。彼は本歌取りの重要を「本歌取りだと分かるように創作することである」とした。つまり、本歌は想起されるべきものであり、本歌取りの歌はその本歌の読みを内包して創作されているということになる。本歌取りと同じ創作手法を用いられているのが、「物語二百番歌合」である。物語歌を番えて成っているこの作品もまた、もともになった物語を想起することが想定されているかのような方法が採られており、それが歌を読む際のガイドとして機能しているかのようである。一方、本歌取りの歌も「物語二百番歌合」もその作品だけで読むことが可能で

あり、もともになった歌や読みを想起することが必須ということではない。想起しても想起しなくても、本歌取りの歌には本歌やその読みが、「物語二百番歌合」の歌にはその歌の収められていた物語内容が内包されている。本歌取りの歌を読むということ、「物語二百番歌合」を読むということとはつまり、すでにそのもともなった歌と物語を読んでいるということなのだ。

キーワード…本歌取り、言語景色、歌、物語

一

藤原定家は本歌取りを得意とし、恋歌の名手であったと言われている。定家の創作する歌に実景はなく、並べられた言葉によって現れる言語景色こそが歌の姿となる。その

景色は、言葉で示されるため、読まれ方によって種々に現れる。本歌取りの歌の本歌が即座に思い浮かび、その歌の読みも取り込んで重層的に歌を読もうとする人もいれば、本歌取りの歌だとすら気がつかない人もいるだろう。恋の歌の語り手を自分自身と重ね心を乱す人もいれば、その心情が全く理解できない人もいるだろう。同じ言葉を読んでも、歌の鑑賞者の経験値や知識量、感受性によって現れてくる景色は異なる。歌に限らず、言葉を読むということは、読むその人その都度において常に新しい景色が展開されるということなのだ。

定家の生きていた当時、歌の道は飽和状態にあった。「近代秀歌」には次のような言葉がある。(1)

【資料1】「近代秀歌」

やまとうたの道、浅きに似て深く、易きに似て難し。弁へ知る人またいくばくならず。昔、貫之、歌の心巧みに、たけ及び難く、詞強く、姿おもしろきさまを好みて、余情妖艶の軀をよまず。それよりこのかた、その流を承くともがら、ひとへにこの姿におもむく。¹ただし、世下り人の心劣りて、たけも及ばず、詞も賤しくなりゆく。いはむや近き世の人は、ただ思ひ得る風情を三十一字に言ひ続けむことをさきとして、さらに姿詞の趣を知らず。これによりて、末の世の歌は、

田夫の花の陰を去り、商人の鮮衣を脱げるが如し。然れども、大納言経信卿・俊頼朝臣・左京大夫顕輔卿・清輔朝臣、近くは亡父卿、即ちこの道を習ひ侍りける基俊と申しける人、このともがら、末の世の賤しき姿を離れて、つねに古き歌をこひねがへり。この人々の思もひ入れて秀れたる歌は高き世にも及びてや侍らむ。²今の世となりて、この賤しき姿を些か変へて、古き詞を慕へる歌あまた出で来たりて、花山僧正・在原業平・素性・小町が後絶えたる歌のさま、わづかに見え聞つる時侍るを、物の心さとり知らぬ人は、新しき事出で来て歌の道変りになりと申すも侍るべし。ただし、この頃の後学末生、まことに歌とのみ思ひて、そのさま知らぬにや侍らむ。ただ聞きにくきこととして、易かるべきことを違へ離れることを続けて、似る歌をまねぶと思へるともがらあまねくなりて侍るにや。

傍線部1では、人々の心が劣ったことで満足されるような歌が現れなくなったことが述べられ、傍線部2では、近年は歌が些か再興し、古き詞を慕ったものが現れているが、それを知らない人々が新風であると言っていると述べている。これらの言葉により、定家は古典復古主義である

と捉えられがちなのだが、定家は同じ「近代秀歌」の中で次のようにも述べている。(2)

【資料2】「近代秀歌」

詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、寛平以前の歌に
ならはば、自らよろしきこともなか侍らざらむ。

また、「詠歌大概」の中にも同じような言葉が見られる。

(3)

【資料3】「詠歌大概」

和歌無師匠。只以旧歌為師。染心於古風、習詞於先達
者、誰人不詠之哉。

詞(言葉)は古くを求めながらも、心はあくまでも新しさを求める。それは、古い歌と同じ言葉を使いながらも、その言葉が現す景色を異とすること、あるいは、古い歌の景色を想起させつつ、それに累加した新たな景色を見せるということではないだろうか。古い詞は「慕ふ」ものであり、それはつまり懐かしい対象として位置するべきものである。「ああ、あの歌か」と想起させることで、その歌の「読み」をも想起させ、「あの歌のあの景色」を想い浮かべながら、読まれた歌を読む。本歌取りの歌はそのようにして読むからこそ重層的となる。古い歌は「慕ふ」対象であるからして、「寛平以前の歌にならふ」との言葉は寛平以往に還るということではなく、「ならふ」べき歌の具体例

の一つだと捉えられる。

定家作の本歌取りはだから、本歌がわかるように、本歌の読みを重ねられるように作られている。(4)

【資料4】「拾遺愚草」藤原定家・二五〇七

かきやりしその黒髪のすぢごとに打ふすほどは俤ぞたつ

この歌は、定家の作歌による本歌取りの歌である。「かき撫でた黒髪の一筋一筋が独り寝をするほどに思い出される」と詠むこの歌は、和泉式部の次の歌がもととなっている。(5)

【資料5】「後拾遺和歌集」和泉式部・恋三・七五五

黒髪のみだれも知らずうちふせばまづかきやりし人ぞこひしき

この二首はもちろん単独で読むことが可能である。しかしこの二首は傍線部で示した通り、「かきやりし」、「黒髪の」、「うちふす」との歌語により、定家の歌を見れば、歌に明るい人であれば即座に和泉式部の歌を想起させるようにできている。そして、その和泉の歌が想起されれば、この二首が喚起するのは単独の意味よりもむしろ、黒髪をかき撫でた男と、かき撫でられた女の歌として読む読みである。この二首が単独である時、それはどちらかと言えば別れてしまった恋人を思うような独り寝の悲しみの歌であ

る。しかし、一八〇年あまりの時の隔たりを越えて二首が並んだ時、歌は相思相愛の男女が贈り合ったかのような、喜びをも感じさせる歌へと読み換えることが可能になる。

定家の歌が和泉式部の歌を本歌として成立しているとはいえ、和泉式部の歌と定家の歌はそれぞれ独立するものである。定家は本歌を巧みに想起させるように本歌取りの歌を作る。本歌を想起させるように作歌している以上、本歌を排除することはできず、ゆえに本歌取りの歌の場合において二首を切り離して考えることはできない。

むしろ本歌があることは想起されなければならないとも言えるのではないだろうか。それは、「近代秀歌」や「詠歌大概」などで繰り返し述べられた、古い詞を慕い、新しい心を求めるという態度、古の秀歌の放棄ではなく、それを取り入れながら共に新しい展開をしようとする試みであると捉えられる。

「かきやりし」とする定家の歌も、本歌と並ぶことによつて相思相愛の歌としての新たな読みを開いた。それは、和泉式部の歌についても同じ事が言える。和泉式部の歌も、定家の歌の本歌となり、定家の歌の本歌として想起された時、贈答歌としての新たな読みを示した。それは、恋の悲しみの歌として単独であった時の読みを捨てるものではなく、その読みを残したままの読みであり、単独であった時

とはまた別の読みが付け加えられたと考えられる。定家の歌の本歌となることでそれが見え、読みが新たに開かれたのだ。本歌取りの歌は、単独であることもできる。しかし、もともとあった歌を想起することで、そこには新しい読みが、本歌にも、本歌によってできた歌にも付け加えられるのだ。

二

定家が本歌取りの元とする歌は、実作の歌に限らず、物語内の歌や物語内容からも選んでいた。次の歌などがそれにあたる。(6)

【資料6】「拾遺愚草」藤原定家・二四一五

おなじ年九月一三夜、水無瀬殿恋十五首歌合に、春恋
わすればや花にたちまよふ春霞それかとばかり見えし
あけほの

この歌は、「源氏物語」の次の場面がもとになっていると言われている。(7)

【資料7】「源氏物語」野分巻

◎野分の日、夕霧、紫の上を垣間見る

大臣は、姫君の御方におはしますほどに、中將の君参
りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸開きた
る隙を何心もなく見入れたまへるに、女房のあまた見

ゆれば、立ちとまりて音もせで見る。御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高きよらに、さとにほふ心地して、³春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。⁴あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。御簾の吹き上げらるるを、

人々押へて、いかにしたるにかあらむ、うち笑ひたまへる、いといみじく見ゆ。花どもを心苦しがりて、え見棄てて入りたまはず。御前なる人々も、さまざまにものきよげなる姿どもは見わたさるれど、目移るべくもあらず。⁵大臣のいとけ遠くはるかにもてなしたまへるは、かく、見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、至り深き御心にて、もしかかることもやと思すなりめりと思ふに、けはひ恐ろしうて、立ち去るにぞ、西の御方より、内の御障子ひき開けて渡りたまふ。

傍線部3が最も強く音が似る部分だろう。「源氏物語」において、はからずも紫の上を垣間見た夕霧は、はじめ、傍線部4のようにその美しさに見とれてしまう。だが、傍線部5にあるように、その美しさ故に、父である光源氏が自分と紫の上が近づくことを避けているのだと気づき、こ

の状況が露見することに恐れを抱く。

そのような場面をもとし、想起させる定家の歌はだから、「わすればや」との言葉から始まる。忘れないその事は、「源氏物語」の物語、夕霧が感じた紫の上の美しさを見てしまった事実と重なって読み手に捉えられるだろう。故にこの歌は多く、「桜のようなあの美しい人を忘れない」と解釈されている。

さて、傍線部3に目を戻すと、「源氏物語」において、春の曙の霞の間から、趣深い樺桜を見た心地がするとある。つまり、春の曙の時に霞の間から見たのは、樺桜に例えられた紫の上であった。

しかし、定家の歌を見ると、忘れないものとして読み取れるのは、「花にたちまよふ春霞」である。見た対象物は「それ」という具体性のない何かでしか表されておらず、もう少し拡大するならば、その春霞によってそれだとはかり見させた暁という時間そのものだと解され、「源氏物語」とは異なっている。にも関わらず定家の歌が「花を忘れたい」と解されてしまうのは、「源氏物語」の場面に引きづけられたがための誤解だと言わざるをえない。「源氏物語」では、春の曙の霞の間からでも樺桜、紫の上だと気づくことができた。しかし、定家の歌においては、曙の時に見たものは花にたちまよふ春霞によって、「それ」であるは

ずだと言えるものでしかなかった。「それ」が本当に「それ」そのものなのかは分からない。

それでも、その「それ」が「源氏物語」における樺桜であり、定家の歌においてその樺桜に相当する花を忘れたいと解釈させるのは、定家の歌から「源氏物語」の物語内容が想起されるからであり、定家の言葉に従えば「古き詞」を用いているからである。誤解されることは想定されていたかもしれない。なぜならば、「それかとはかり見える」という言葉で想起される場面がもう一つあるからだ。それは、「源氏物語」若菜上の一場面である。(8)

【資料8】「源氏物語」若菜上巻

◎六条院での蹴鞠の日、柏木、女三宮を垣間見る

猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱いと長くつきたりけるを、物にひきかけまつらはれにけるを、逃げむとひころじふほどに、御簾のそばいとあらはに引き上げられたるをとみに引きなす人もなし。この柱のもとにありつる人々も心あわたしげにて、もの怖ぢしたるけはひどもなり。⁶几帳の際すこし入りたるほどに、桂姿にて立ちたまへる人あり、階より西の二の間の東のそばなれば、紛れどころもなくあらはに見入れる。紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎすぎにあまた重なりたつけぢめはなやかに、草子のつまのやうに見え

て、桜の織物の細長なるべし。御髪の裾までけざやかに見ゆるは、糸をよりかけたるやうになびきて、裾のふさやかにそがれたる、いとうつくしげにて、七八寸ばかりぞあまりたまへる。御衣の裾がちに、いと細くさやかにて、姿つき、髪のかかりたまへるそばめ、いひ知たずあてにらうたげなり。⁷夕影なれば、さやかならず奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。鞠に身をなぐる若君達の、花の散るを惜しみもあへぬけしきどもを見ると、人々、あらはをふともえ見つけぬなるべし。猫のいたくなければ、見返りたまへる面もちもてなしなど、⁸いとおいらかにて、若くうつくしの人やとふと見えたり。

傍線部6で、立っている人の姿を確認し、その様子の詳細が語られる。そして、傍線部7にあるように、夕方であつたためはつきりと見えないことを残念に思うが、傍線部8で美しいあの人であろうと直感したことが語られている。

結果的にそれは確かに柏木が想像した美しいあの人、つまり女三宮であつたが、垣間見をしたその瞬間においては確定できなかった。あくまでも「若くうつくしの人や」との、柏木の願望的推測に過ぎない。それは、定家の歌の「それかとはかり見えし」と同じと言える。定家の歌と「源氏

「物語」の若葉上の巻の物語本文に、資料7であげたような音の類似は見られない。だが、言葉によって得られる情報は、同じような物語の景色を現してくる。それは、まず想起される野分の巻との類似性と同程度にすでに在ったもので、見出だすのか見出ださないかという違いだけで、実は常に可能性として読み取れる所にあつたのだ。見易い理由から得られる読みはあくまでも読み手がとらえやすく、目に見えやすいものであり、その奥にはさらなる読みが存在しているかもしれないのだ。「かきやりし」の歌も、「わすればや」の歌も、古い言葉を慕い、想起させることで、新しい読みの可能性を紐解いている。

三

物語歌を番えて歌合とした「物語二百番歌合」もまた、引用によつて成立している作品である。「源氏物語」と「狭衣物語」から歌を引用していること、それぞれの歌の最初には詞書が付され、その歌が記されている物語内容を把握するための情報があること、作者名が記されていることから、本歌取りの歌よりも、歌の収められていた元の物語へ還ることが容易である。歌の収められていた物語の物語内容を取りこむことが要求されているとさえ捉えられるかもしれない。

「物語二百番歌合」は前半部である「百番歌合」と、後半部である「拾遺百番歌合」から成っている。いずれも左には「源氏物語」の歌が配され、右には、「百番歌合」では「狭衣物語」の歌が、「拾遺百番歌合」では「夜の寝覚」などの十篇の短編物語の歌が配されている。「百番歌合」恋部二番に番えられている歌は次のような歌である。(9)

【資料9】「百番歌合」恋部

二番

左 弘徽殿の三の口にて、朧月夜の尚侍に

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

右 大将におはせし時、弘徽殿にて、女二の宮に

死にかへり待つに命ぞ絶えぬべきなかなかに頼みそめけむ

左の「源氏物語」歌の詞書には「弘徽殿」「三の口」「朧月夜の尚侍」などの言葉が記され、「源氏物語」の光源氏と朧月夜との出会いの場面であることが想像される。右の「狭衣物語」も同じで、「大将」、「弘徽殿」「女二の宮」との言葉から狭衣と女二の宮との逢瀬の場面であることが分かる。「物語二百番歌合」の歌は、その歌の収められていた物語の物語内容が喚起されることがすでに織り込み済みなのである。

このことは、左の歌は「源氏物語」の歌であり、右は「狭衣物語」の歌であるという事実を明らかにしていると言ひ換えることができる。この至極当然の事實は、しかし、番えられている歌には必ずその歌が詠まれるに至った物語的背景があるという事実を突きつけてくる。それは、歌を歌だけで見ているのではなく、歌とその背景にある物語内容と一緒に鑑みているということになる。「物語二百番歌合」は「源氏物語」と「狭衣物語」という二つの物語から歌を選んで番えた物語であるという前提は、同時に、「物語二百番歌合」の歌は歌+歌が詠まれている物語内容によって読まれているということをも示している。

これはさらに、「狭衣物語」は「源氏物語」と類似しているという前提をも想起させることとなる。だからこそ、次のような論が提示されることになる。(10)

【資料10】樋口芳麻『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』

(前略) 歌合において左は右よりも重んぜられており、とくに一番左の位置は重いから、定家が『源氏物語』の歌を左に、『狭衣物語』の歌を右に配している以上は、『狭衣物語』の歌よりも、『源氏物語』の歌に優位を認めていることは明白であり、(後略)

「歌合において左は右よりも重んぜられており」という点に留意する必要があるが、それを置いておいても、「源

氏物語」の歌に優位を認めていることが明白」とまで言い切るのには難しいのではないだろうか。これは、「狭衣物語」が「源氏物語」に着想を得て創作された物語であるという前提をも含めた判断であるように感じる。

樋口氏の言うように、歌合において左歌は右歌よりも重んじられており、判詞が付されている歌合作品では、左歌に多く「勝」の字が記されている。しかし、「物語二百番歌合」に判詞はなく、二首に優劣はないと解される。優劣がないということは、番えられた二首は同等のものである、その二首が番えられることによって捉えられる「読み」を見るべきなのだ。本来並ぶはずのなかった二首である。「物語二百番歌合」で番えられ、たまたま同じ番の左歌と右歌として採られ、比べられることになった。それは全くの偶然であり、そこには「物語二百番歌合」でしか見ることのできない「読み」が必ず生じる。

先に挙げた二番(資料9)の番を例にしてみたい。二番の左歌は、「源氏物語」の光源氏と朧月夜の出会いの場面で詠まれた歌、右歌は、「狭衣物語」の狭衣と女二の宮の逢瀬の場面で詠まれた歌であると記した。これらの物語的背景があることで、その歌には、歌だけでは分かり得ないその前後の物語までもが付与されることとなる。読者は歌が収められていた物語の前後の内容までも取り込み、「物

語二百番歌合」の読書行為を楽しむ。

では仮に、「源氏物語」も「狭衣物語」も知らない読者が「物語二百番歌合」を読んだらどうなるのだろうか。詞書により、歌が詠まれるに至った背景は知るだろうが、それはあくまでも状況の認知にしかならず、物語内容を取り込むといった事態には至らない。左歌は二番の左歌として、右歌は二番の右歌として読まれていくことになる。

左歌は、「おぼろけならぬ契りと思ふ」とあるように、出会いの理由を、私とあなたとがひとかたならぬ仲であるためだとしている。私が誰であなたが誰なのかは、歌からでは判断ができない。それに対する右歌は、「待つに命ぞ絶えぬべき」「頼みそめけむ」と、待っていたことを後悔するかの具体的な言葉が並んでいる。この歌においても私とあなたに具体性はない。相手との出会いを喜ぶ歌と、相手を持つことを後悔する歌が並んだ時見えてくるのは、出会いと別れという、一つの恋の始まりと終わりという物語ではないだろうか。この物語には、「源氏物語」の物語内容も「狭衣物語」の物語内容も必要なく、ただ歌の言葉から判断される状況によって、物語が完成している。「源氏物語」と「狭衣物語」を知らなくても、あるいは思い出せなくても、さらに言えば、あえて思い出そうとしなくても、「物語二百番歌合」の二番の物語がここにはある。

これは、「源氏物語」や「狭衣物語」の物語内容が排除されているということではない。「物語二百番歌合」が、物語の中の歌を選んで番えているという前提はどこまでいっても消えることはなく、むしろそれが分かるように詞書きも付されている。それでもなお、「読まずに読む」という読み方が可能だということである。「読まずに読む」ことは、「読まない」という存在のさせ方と捉えられる。

四

「読まずに読む」という読み方は、もちろん他の番にも適応される。「百番歌合」三番は次のような歌が並べられている。(Ⅱ)

【資料Ⅱ】「百番歌合」恋部

三番

左 三の口にて 二条の内侍のかみ

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をは訪はじ
とや思ふ

右 一品の宮、人しれぬさまにおはしましけるを、
ゆくへおぼつかなくおぼしめし悩みけるころ、
尾花がもとの思ひ草の、霜深くなりゆくを御覧
じて

尋ねべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露

左歌は、「訪はじと思ふ」と私のことを訪ねないつもりなのかと相手責める歌と解することができる。それに対する右歌は、「誰に問はまし」と誰に尋ねたら良いのかと、訪ね先を問う歌と読むことができる。男女の応答の歌であるかのように読むことができる。この読みにこの歌の収められていた「源氏物語」や「狭衣物語」の物語内容は関与してこない。

では、この歌の元あった場所である物語の内容はどうなっているのだろうか。左歌は詞書きに「三の口にて」とあることから、二番左歌と関連のある場面の歌であることが想起される。実際の本文は次のように記される。⁽¹²⁾

【資料12】「源氏物語」花宴卷

わびしと思へるものから、情けなくこははしうは見えじと思へり。酔ひ心地や例ならざりけん、ゆるさむことは口惜しきに、女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし、らうたしと見たまふに、ほどなく明けゆけば、心あわたたし。女は、まして、さまざまに思ひ乱れたる気色なり。「なほ名のりしたまへ。いかでが聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりとと思されじ」とのたまへば、

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の花をば問はじと思ふ

と言うさま、艶になまめきたり。「ことわりや。聞こえ違えたるもじかな」とて、（以下略）

一夜を共にした相手の名を尋ねる光源氏に対し、「消えてしまったら尋ねないつもりなのか」と切り返す朧月夜に好感を抱く光源氏という構図がここからは読み取れる。

一方の右歌は、「一品の宮、人知れぬさま」⁽¹³⁾「ゆくへおぼつかなく」とあることから、飛鳥井の行方を探している狭衣の歌であることが想起される。⁽¹⁴⁾

【資料13】「狭衣物語」巻二

もの思ひの花のみ咲きまさりて、水際隠れの冬草は、いづれともなくあるにもあらぬ中に、尾花の思ひ草は、よすがと思さるるを、むげに霜枯れ果てぬるは、いと心細く思しわびて、

たづぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露

あさましう、誰とだに知れずなりにしかば、なほ思ふにも言うにもあまる心地ぞしたまひける。

誰かも分からないまま別れてしまい、残念に思う狭衣の様子が記されている。狭衣が誰か分からないまま別れてしまった相手は飛鳥井であり、狭衣と飛鳥井の悲恋という構図が示されることになる。

歌の収められていた物語の内容を紐解くことで、それぞ

れの歌は、光源氏と朧月夜の物語の歌である左歌と、狭衣と飛鳥居の物語の歌である右歌として在ることになる。それは、それまで匿名性を帯びていたはずの歌の景色に、特定の物語景色が付与されるということであり、そうなることで、この二首が番えられていることに違和感を覚えることになる。そもそも二つの物語は異なる物語であるため、並べることでできないものである。しかし、並べられ、その物語が開示されてしまえば、その物語を比べてしまう。後に女の素性が朧月夜であることを知り、互いに惹かれ合う関係になる光源氏と、死別してしまう狭衣の歌として、「違いがある」とか「物語展開は類似している」といった比較の対象となってしまう。そこには、「源氏物語」と「狭衣物語」の成立関係（「狭衣物語」が「源氏物語」に影響を受けているという前提）も関係しているであろう。

先に述べた通り、「物語二百番歌合」は歌の収められていた物語を想起させるかのような創作方法をとっているため、物語が想起されることはむしろ想定されている。しかしそれは、歌を比べるためではなく、あくまで「物語二百番歌合」の番を読むための手段となる。

例えば、光源氏と朧月夜の物語だと知った左歌は、「訪はじとや思ふ」と問うた朧月夜に應えるように光源氏はその正体を突き止め、その後生涯に渡って恋慕う関係になっ

たという物語を思い出すことになる。この歌はその恋物語の始まりの歌として位置づけられることとなる。右歌もまた、物語本文が開示されることで、都にいない飛鳥井と彼女を襲った悲劇、そして飛鳥井が宿していた子の存在などが明らかとなり、狭衣と飛鳥井物語の全容を知った上で「誰に問はまし」と尋ねている歌と解することになる。物語内容を知ること、歌は物語の歌としての在り方を強める。しかし、それは知ると知らないとに限らず、変わらない事実であつたはずである。物語を想起しようとしまいと、「物語二百番歌合」の歌としてその歌は在るのである。「物語二百番歌合」は、「源氏物語」歌と「狭衣物語」歌を番えた作品である。それと同時に、「物語二百番歌合」の歌である。物語を思い出さなくても歌は物語歌であり、物語を思い出しても歌は「物語二百番歌合」の歌である。歌にはすでに物語が内包されており、「物語二百番歌合」を読むということは、物語にすでに接しているという状態なのである。

註

- (1) 『新編日本古典文学全集 歌論集』（橋本不美男、有吉保、藤平春男 校注・訳、小学館、平成14年1月20日、449頁）
- (2) (1) と同じ書物（451頁）

- (3) (1) と同じ書物 (475頁)
- (4) 『訳注 藤原定家全歌集上』 (久保田淳 訳、河出書房新社、昭和60年3月15日)
- (5) 『新日本古典文学大系 後拾遺和歌集』 (久保田淳、平田喜信 校注訳、岩波書店、平成6年4月20日)
- (6) (4) と同じ書物
- (7) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』 (阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男 校注・訳、平成6年3月1日〜平成10年4月1日、264頁)
- (8) (7) と同じ書物 (140頁)
- (9) 『定家自筆本物語二百番歌合と研究』 (竹本元暁・久曾神昇、未刊国文資料刊行会、昭和30年12月20日)
- (10) 『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』 (樋口芳麻呂、ひたく書房、昭和57年2月28日)
- (11) (9) と同じ書物
- (12) (7) と同じ書物 (357頁)
- (13) 『狭衣物語』で一品の宮は二人登場する。一人目は狭衣と一条院皇女との娘、二人目は狭衣と飛鳥井の間に生まれた姫君である。しかし、当該歌は飛鳥井の行方を探す歌であるから、定家の勘違いだと推定されている。
- (14) 『新編日本古典文学全集 狭衣物語』 (小町谷照彦、後藤祥子 校注・訳、平成11年11月20日〜平成13年11月20日、157頁)

(やまもと・みき、創価大学文学部助教)